

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標	<ul style="list-style-type: none"> ・4つのヘルプ・センターでの保健衛生、教育関連活動、技術トレーニングなどが継続的に実施され、家事使用人として働く少女たちの生活環境が改善される。 ・家事使用人として働く少女たちの雇用主とその家族や地域住民に本活動への理解が深まる。 ・バングラデシュ社会に本活動および家事使用人として働く少女たちの現状について、メディアや同様の活動を実施する NGO・国際機関との連携を通じて広く伝わる。
(2) 事業内容	<p>ダッカ市内4ヵ所（コライル、パイクパラ、ルプノゴール、アジンプール）に設置したセンターにつき、週に5日、1日2時間のペースで運営を継続し、以下の各活動を実施した。</p> <p>インフォーマル教育 コライル（市内北東部）36人、パイクパラ（市内西部）23人、ルプノゴール（市内北西部）32人、アジンプール（市内南西部）23人、計114人がベンガル語の基礎的な読み書き、簡単な算数を学んだ。</p> <p>医療支援 子どもたちの状況に応じて破傷風の予防接種をしたり、消毒液の提供などを継続して行った。また、身の回りを清潔にすることの大切さにつき、ゲームを通じて67人が学んだほか、年齢層の高い子どもたちには六大栄養素とそれを意識した調理法についてや簡単な性教育を受ける機会も提供した。</p> <p>スキルアップ研修 家事：洗濯に関する研修を79人が受講。種類に応じた効率的な洗濯の仕方について学び、日常生活に役立てることができた。 手縫い：手縫いの基本およびボタンホールステッチを学び、計84人がボタンつけをできるようになった。 料理：チョッポティなど、スナック的に食べる軽食の調理研修を計6回行い（コライルとルプノゴールのみ2回ずつ）、のべ138人が参加。</p> <p>地域住民等への啓蒙活動 雇用主427人および子どもたちの親181人への個別訪問を繰り返し実施。またアジンプールとパイクパラでは「子どもの権利」をテーマにしたワークショップを実施し、計24人の雇用主が参加した。この他、通学児童をもつ保護者を対象にした集会を2回（計65人参加）、イスラム教の宗教指導者を集めた会議を2回（計12人参加）行った。</p> <p>事業担当者、専門家による現地モニタリング訪問 秋庭智也：2011年9月（担当者モニタリング） 内山智子：2011年10月（担当者モニタリング） 藤崎文子：2011年12月（担当者モニタリング） 筒井哲朗：2011年12月（専門家モニタリング）</p>

<p>(3) 達成された効果</p>	<p>4つのセンターすべてで活動を継続することができ、インフォーマル教育、スキルアップ研修など、計画した活動をほぼ当初の予定どおり進めることができた。裨益者数は年間の目標数値を達成できる見込みが高い。「期待される効果」については、事業完了までに子どもたちを対象にしたインタビューや簡単なテスト、あるいは住民を対象にしたグループディスカッション等を通じて測定する予定。</p> <p>なお、今期は9月および11月に2回のイード（イスラム教の祭り）があったこともあり、マスメディアやNGO、国際機関とのワークショップの実施は見送った。2012年1月以降はバングラデシュの乾期で、各種のイベント等が多く行われる時期にもあたるため、事業期間後半において、本事業の存在をより多くの人々に知ってもらうための活動に、より力を入れていく。</p> <p>【事業当初に想定した裨益者数】 家事使用人として働く少女 200名 少女たちの雇い主とその家族 約800名 少女たちの家族 約800名 少女たちが働く地域の住民 約3,500名</p> <p>【事業当初に設定した期待される効果】 インフォーマル教育（読み書き、計算、保健衛生教育） スキルアップトレーニング（アイロンかけ、刺しゅう、料理）：働く少女たちが新しい技術や知識を学び身につけた結果、生活環境が改善される</p> <ul style="list-style-type: none"> ・簡単な読み書きや計算ができるようになる（40人） ・センターに通う少女の1/3以上が、センターに通う前に比べて病気になる頻度が減ったと感じる ・センターに通う少女の1/3以上が新しく獲得したスキルによって給与が増加する、または追加的な収入を得られるようになる。 <p>啓蒙活動：雇用主が少女たちに対する認識を改めることで、彼女らに対する暴力および不当な扱いが減る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・センターに来る少女たちの半数以上が、雇用主の態度が良いほうに変化したと感じる <p>ワークショップ開催：雇用主やダッカ市民が、家事使用人として働く少女たちの状況を認識し、家事使用人を生み出さないようにするための社会環境が醸成される</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動がバングラデシュのメディアに取り上げられる（15回） ・ワークショップ等を通じてセンターの存在を知った子どもたちが新たにセンターに通い始める（20人）
<p>(4) 今後の見通し</p>	<p>引き続き、4つのセンター運営を行うとともに、各地域の住民とのコミュニケーションに努めていく。また日本から事業担当者、専門家のさらなるモニタリング派遣も実施する。なお、別事業であるチッタゴンでの同様の事業との経験交流とあわせ、本事業終了後の新たな活動計画の策定にも取り組む。</p>